

「草木塔」のころ 1
— 人々の元来性についての試論 —
The spirit of “Soumokutou” 1
— Essay on the nature of the people —

安部 孝 ABE takashi
(名古屋芸術大学教育学部)

1 草木塔

下の写真は、山形県南陽市の荻小学校¹の校門のそばに、すぐ前を通る道路に面して建立されている「草木供養塔」(「草木塔」)である²。「草木塔」(そうもくとう)は、山形県の置賜地方に最も多くあるという。しかし、特にそれに関する知識や指し示す表示などがなければ、その石塔を「草木塔」と気付く、それだと分かることなどあまりないのではないかと思う。私たちは、日常、往来で、それほど石碑や石塔、またその碑文に関心や目を留めることは多くないからである。

「草木塔」は、一般には、山形県米沢市田沢地区が発祥の地といわれ、米沢市と福島県喜多方市を結ぶ国道(121号線)周辺に数多く見られるという。他地域には、昭和後期から平成に入り、自然保護の視点から着目され、建立されたものもあるという



文政七年銘「草木供養塔」南陽市荻 1038(字沼田)
市指定有形民俗文化財

が、古い時代の「草木塔」の建立は、どのような理由で、なぜこのような形として具体化し、広まったのだろうか³。

2 草木塔の“意味”

「草木塔」には「草木供養塔」「草木供養碑」などと刻まれており、「伐採した樹木に対して感謝と供養の気持ちを込めて建立された」ものであるという⁴。

仏教辞典に書かれた供養の意味には、本来、「…仏法僧の三宝や死者の霊などに対して供物をささげること。不殺生を主張する仏教が、バラモン教などの動物で行う供養に対して行った祭儀形式で、…、さらに塔や廟が仏に代わる祭祀の対象として供養塔となり、……」⁵とあるが、当時(江戸時代安永年間や文政年間)の庶民生活においてこのような語義の解釈や知識、理解を踏まえた使用が広くなされていたとは思われず、純粋な慰霊鎮魂とその在り方(姿や表現、行為も含む)であったと考えられる。つまり、一般的には、松尾のいうように、「筆供養」

³ 昭和終期-平成初期の、日本自然保護協会の動きと社会の動きを、日本自然保護協会の沿革には、1989(平成元)年『生物圏保護区(MAB)』の考え方を林野庁に働きかけ、国有林に『森林生態系保護地域』制度発足、1994(平成6)年『学校における環境教育』発行などの動きが書かれている。日本自然保護協会 HP. https://www.nacsj.or.jp/naacs_j/history/20240110、参照。

⁴ 「置賜発! 環境精神・草木塔」「置賜文化フォーラム」平成22年10月掲載/大竹茂美(置賜文化フォーラム事務局)/
<http://okibun.jp/soumokutou01/> 参照。

⁵ 「供養」中村元監修『新・仏教辞典』誠信書房、1981年、p.134、参照。

¹ 2024年3月にて休校。

² 写真は、「南陽市文化財検索 文政七年銘草木供養塔」
https://nanyo-bunka.jp/cultural_retrieval/index.php/20250110より。

「針供養」「人形供養」といったものと同様に、それぐ（ママ）がその機能によって社会生活を助力し奉仕してくれたことに対する感謝の思いを、祖霊の供養に準じて表すもの」⁶であったと考えられる（下線、安部）。

3 草木のとらえ方、態度

例えば、ある神（仏）を祀り、それ（神（仏）、仏像や碑、塔、それらについての教えやまつわる話など）に対する信仰が広まり、お札（守護札など）が配られ、各家で祀られたり、分祀されたりすることなどはあるが、あくまでそこには信仰が前提として存在する。これを踏まえれば、「草木塔」に関しては、そもそも草木を供養の対象とする思想（信仰）の存在と広がり、理由が先行しなければならないはずである。

菊地によれば、安永9（1780）年建立の米沢市大明神沢の「草木塔」の偈文には「一佛成道観見法界草木国土悉皆成佛」とあり、これは「何のために建立されたのか」を考える重要な手掛かりになるという。その偈文は中世の能・謡曲⁷に登場するとされるが、一般的には、「一仏がさとりを開くと、人間や動物をはじめ、山川や草木に至るまですべてがその徳により成仏する」ことを意味し、大乘仏教の教説に基づくものであろうと推測される。仏の慈悲や救済はすべてに及び、人間や動物にとどまらず、一切が成仏することができるという説である⁸。しかし、これ（偈文、偈文が刻まれていること自体）は直接的に、草木らに対する仏説、仏教に基づく慰霊鎮魂の儀式や供養の必要性（建立の理由）を意味するものではなく、（「草木塔」をもって供養しようとする）人間にとっての「草木塔」は、何より供養の方法であり、その方法によって理由（施主の思い）

が満たされ、それによって目的（供養そのもの、また供養の証左）となり得るものと考えられる。

「草木塔についての詳しい由来や経緯が記された文献が残っていないことが起源の謎を深め」ているが⁹、何らかの理由によって伐採された木々への供養か、伐採にかかわった人々への災い（怨）を鎮めるためかは明らかではないにせよ、「草木」に「人間のようなもの」がある、もしくは人間と同様であることを認めたり、感じたりしていることに間違いはないと考えることは、十分に可能である¹⁰。

これらから考えられるのは、当時の置賜地方（米沢藩領内）には、草木を供養する、慰霊鎮魂する思想があった（ある時期に興った。受け入れられた。）ということ、その思想は大乘仏教の教説に基づいている（影響を受け、展開している）ということ、そして供養のために、「塔」を建立したということである¹¹。菊地は、「草木塔初期のものは、死者供養とともに草木の怨霊鎮魂のねらいをもつものだろう」と述べており、それらは「樹木伐採に関わる犠牲者の鎮魂供養」と「樹木供養」「感謝の心」「草木の怨霊に対する人々の不安」などの心情に起因すると理解される。およそ、当時の森林伐採にかかわる人々は大規模な森林伐採による痕や変わり果てた山野の容貌と伐採され横たわる樹木の姿を目の当たりにすることで、ただ感謝の気持ちを抱くにとどまらず、格別「供養」をしなければ、「霊を鎮めなければ・慰めなければ」と自然に思った（感じた）ということも十分に察し得るのである。

⁹ 前掲「置賜文化フォーラム」参照。

¹⁰ 偈文（の内容やそのような思想）が草木の供養についての必要性を誘うものか、偈文が草木に捧げられたり、何らかの願いをかなえるための必要や儀式の一つであったりするのか、それらについて詳細に吟味されてはいない。しかし、草木を「供養すること」、「供養することが必要と思うこと」の両者に共通するのは、草木は供養や回向の対象であるという考えである。

¹¹ 現実的なきっかけとしては、1772（安永元）年に米沢藩の江戸屋敷が焼失し、再建のために現在の米沢市の山林の木々を伐採したこと、17780（安永9）年に現市内で大火があり、復興のための材木が伐採されたことがあげられる。菊地、同上書、pp.46-47 参照。「草木塔」Wikipedia、<https://ja.wikipedia.org/wiki/20241010> 参照。

⁶ 松尾心空「特集 初めての仏教重要語 なじみのある言葉から」『大法輪 平成七年二月号』大法輪閣、1995年、p.103。

⁷ 能の演目『鶴』。平家物語の説話を基にした、世阿弥の作に書かれている。

⁸ 菊地和博「江戸時代建立の草木塔の考察—偈文『一佛成道観見法界 草木国土悉皆成佛』を糸口にして—」『東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要 第5号』、2015年、p.35。

4 人々の心情や価値観

「草木塔」の建立の理由にかかわる心情や人々に根付いた当たり前の考え（地域、文化的特性を帯びているが、そこに在る人間としての純粋な意識や心情、考え方や価値観。本考察では“元来性”と呼びたい）が、「草木塔」以外にも共通して存在するならば、私たちはそれをどのように知ることができるだろうか。

先述のとおり、「草木塔」の供養、建立の理由が偈文や仏教の教説にまま由来すると考えるならば（偈文を手掛かりとするならば）、それは、「信仰に基づきそのように理解し行動した」こととなるが、それはどのような内容なのだろうか。

「草木塔」の偈文が登場する「鶴（ぬえ）」の、「一仏成道観見法界 草木国土悉皆成佛」を改めてみても。以下、「the.能.com 能・演目辞典：鶴『演目 STORY PAPER：鶴』」を参照する¹²。

旅僧が読経し、鶴の霊を回向していると、鶴の亡霊がもとの姿のままで現れ、読経を喜ぶ。旅僧 読経の声も浦の波音も、読経の声も浦の波音も、皆万物の実相の現われである、広く恵みある仏法を受けよ、と夜もすがらこの御経を読誦する、この御経を読誦する。

「一仏成道観見法界、草木国土悉皆成仏（一人が成仏すれば、草木国土ことごとく皆成仏する）」

鶴の亡霊

「有情非情、皆俱成仏道（心あるもの、ないもの、皆ともに成仏できる）」

旅僧（仏に）お頼みしよう。

鶴の亡霊 お頼みいたしましょう。

偈文に刻まれている「一仏成道観見法界、草木国土悉皆成仏」は、一切が成仏できる、または成仏できる性を具えているという趣旨であり、「鶴」では、僧の読経として示されている。そしてなお、鶴の言葉として「有情非情、皆俱成仏道」と表現を変え、

強調（趣旨を確かめる）するように示されている（単なる復唱ではない）。

「有情」は、感情や意識を有するものであり、一切の生けるものである。これに対し「非情」は、草木・山河・大地などである。私たちは供養することによって、相手（対象）に回向の意図（思い）が届く（伝わる）ことを期待するが、そこでは、そもそも相手の意志や感情の存在を認めていることになる。しかし、意識や感情を持たない「非情」に対して私たちの思いが伝わるかどうかは分からない。草木が回向されることで喜び、心が慰められることがあり得るとは断言できないのである（そもそも、分かり合う、共感するという発想はあり得ないのである）¹³。だが、このように「有情」「非情」についての私たち（施主）の考え方がどうあれ、また、草木に喜びや慰め、怨などの心が存在しないにせよ、「成仏」することにおいて私たち有情と同じであると理解していた（信じていた）と考えることができるのである¹⁴。

¹³ “私の願い”はあくまでも私の意識であると考え、願いの目的である結果＝成就は、願いの対象（願いを受けた／相手／神仏等）による（よつてもたらされる）もの（利益）か、また、自身の働きとしての願い（自分が願ったこと）によるもの（成果。利益）かという点については詳しく考察されておらず、願いと「叶う、届く、成就する」などとの関係について検討する必要がある。例えば、慰霊鎮魂を為すこと、そのための行為とは私の思いに起因するが、その結果とは、慰められた霊による災いがない（災いを起こさない）、または、魂が鎮って穏やかになるなどを指すのか、それとも、私が供養する・供養したという達成感のような内的事実を指すのか明らかではない。神仏に願い、利益を期待する場合、自分の願いによる成果か、神仏がもたらした利益かによって願いの意味や質が異なってくる。「草木塔」に込められた供養とは、宗教の教義や教説の内側において十分に説明し得るものなのだろうか。私たちの樹木に対する純粋で元来的な心情が仏教思想に十分に回収し得るのかを再考する必要があるだろう（仏教への信仰心に由来するものであるか）。

¹⁴ 私たちの心のあり様としての思いやりは、人の心に対して、相手を慮ることや共感、自他平等観を求めることがある。だが、自他の心情は固有的であり、他者を我がことのように理解し、慮ることは容易ではない。私たちが草木に意識の存在を認める（そう感じる。思う。信じる。）か否かという個別の内的なことがらは、「有情」「非情」など仏教の認識と重ねて理解することもできるが、その認識にあることさえも信仰という個人の内的な事情を前提とするものである。

¹² 「the.能.com 能・演目辞典：鶴『演目 STORY PAPER：鶴』」
https://www.the-noh.com/jp/plays/data/program_052.html/20242028 参照。

5 木々の物語

「草木塔」の建立の理由（発願）や、それ以降の人々のかかわりについては、詳しい文献や資料が残されておらず、これまでの考察は偈文を端緒にした推察にとどまるものであるが、「草木塔」は明らかに、人間が、木々、草木への供養、回向の気持ちを込め、表したものである。つまり、「草木塔」が仏教思想を背景とした「供養塔」であれ、草木への思いや慰霊したいという心情は必ずしも仏教の思想や教説に依るものであるとは限らないのである。例えば、病に苦しむ子どもの平癒を神仏に祈ることとは、苦を除き平癒を求める純粋な思いに続いてとられる、教義や習慣に基づく一つの処方であるのであり、同様に、人々が草木の供養に用いた（依った）偈文は、人心の自然な心情や考えの一つの表現や解決の方法であったと考えることもできるのである¹⁵（下線、安部）。

そこで、人々は、そもそも草木をどのようにとらえていたのか（人心の自然な心情や考え）を、人々の生活の中に具体的に探ってみたいと思う。

例えば、その地域の生活の中で、長い年月をかけて語り継がれ、「明るく生きていく願いとちえ」が込められたものに昔話がある¹⁶。置賜地方（中津川）に伝わる昔話「大木の秘密」では、草木、木々に心や言葉を与え、人間のように振る舞わせている¹⁷。本作が掲載される、山形県内に伝わる昔話を収集した『山形のむかし話』には、「動物の話」「しあわせになった話」「じじばばの話」「かなしい話」「わらい話」に分類された全48話が収められているが、先述のモチーフ、設定をとっているのは、「大木の秘密」のみである。

以下、一部を引用する（部分省略）。

むがしあったけど。

¹⁵ ただし、仏教の教化により、供養することを思いついたという場合もある。宗教や信仰によって他者への心情、価値観、生き方が（宗教性を帯び）培われる場合もある。

¹⁶ 須藤克三「はじめに」山形とんと昔の会、山形県国語教育研究会『山形のむかし話』、日本標準、1978年、pp.2-3。

¹⁷ 文 武田 正、絵 小形晃子「大木の秘密」、同上、pp.230-233。

中津川の山の上に、大きなスギの木が一本生えておったけど。村のもんがねむっている夜になると、一尺（約30センチメートル）のび、二尺のびして、国じゅうのどっから見ても見えるほどになったんだ。

…（略）…

…、酒田の方から苦情がきたんだ。

「大スギのために、酒田の海がみなかげになってしまって、魚がよりつかねぐなってしまった。

このへんの漁師がたいへん困っているから、そのスギの木を切ってけろ。」

…（略）…

…、毎日、朝から大スギの木にのこぎりを入れたんだ。

ところが、ズイコズイコとのこぎりでひいても、つぎの朝になると、みんなきのうののこぎりのあとも見えないように、もとどおりになってしまってるんだけど。

切りはじめてから、もうひと月もふた月もなつたに、スギの木はびくともしないで、一尺、二尺とのびにのびてはあ、先の方は天にとどいてしまったんだけど。

お盆がくるころになったときに、たんぼのほとりに生えたミソハギが、村の一本マツから、うわさを耳にしたんだけど。

「山の大スギの大將が切られてるっていうが、ほんとうか。」

「ああ、毎日のこぎりを入れられてるから、山じゅうの木という木が、毎晩、見舞いにいってるちゅうが、おらも今晚は見舞いに行くどこだ」

…（略）…

…、ミソハギは一本マツといっしょに山の大スギのどこさ見舞いに行ったんだ。そしたら、山じゅうの木という木はみんな集まって、きょうの昼に出たのこぎりくずをひろってきて、大スギの切り口に、ぺたぺたはりつ

けているんだそう。大スギの方は、いたそうに顔をしかめながらも、

「ああ、里の一本マツか、よくきてくれた。」

ていつてから、一本マツのそばに立ってたミソハギを、ぎょろりと見て、

「おめえはだれだ。このあたりでは見かけたことねえが。」

ていうもんだから、一本マツがひきとって、

「おらどこのミソハギもいっしょに見舞いにきたぞだ。」

… (略) …

このあと、大スギがミソハギを蔑むような物言いをしたため、怒ったミソハギが木切りの者たちにこのことを告げ、のこぎりくずがその日の内に焼かれてしまった。そのため、一週間目には、大スギは、ついに倒れてしまったという話である。

この話の特徴は、登場人物（草木と人間）が自身以外を譬えているのではなく、まさに、木は木のままの立場で描かれていることである。とはいえ、草木は草木同士で労り合い、助け合い、また、蔑み、怒り、報復するという感情や、人間との交流も描かれている。つまり、この昔話には、草木に対する仏教的「非情」の意味付けや寓話のような道徳的要素による教育的示唆（性）は見られないのである。

本書の「あとがき」において佐竹は、昔話の語りを通して子どもたちは、「イメージを自由に広げるとともに、先祖の知恵や生きる力のたくましさを受けつぎ、ふるさとや肉親とのつながりを心の中に培っていった」とするが、まさに、ふるさとに生え、息づくものすべてに等しい命やつながりを「イメージ」する心情が育てられ、そのような意識や考えが継がれていったのだと推測される。そのように考えると、「草木塔」は、一つの地域の長い生活の中で素朴なまま醸成されてきた意識や考え、心情が、仏教の教義や教説、塔を作り、祀るなどの回向の所作を引き寄せた時に、もしくは、引き寄せられた時に現れたと考えることができよう。

6 さいごに

私たちが、もう一度心を寄せるべきは、「草木塔」の前後における私たちの純粋な意識や考え、心情である。それは「草木塔」によって隔絶されたが、「草木塔」によって隠されているだけかも知れず、反対に、「草木塔」によって確固と顕わされているものかも知れないものである。いずれにせよ、偈文（仏教の教説、教義）を超えて、草木に対する人々の元来の思いに触れる術（すべ）を持つ必要があるのではないだろうか¹⁸。

¹⁸ 人間の元来性を知る術の獲得は、教育にも共通する喫緊の課題であり、同時に、方法そのものとしても検討する必要がある。